

# 死んだ女が子を産んだ話

——新出土のガンダーラ石彫 (2) ——

小 谷 仲 男

## 一、はじめに

まず、表題について。「新出土のガンダーラ石彫 (2)」というのは、私がさきに「賢者の子裁判——新出土のガンダーラ石彫——」(『大手前女子大学論集六号』)を發表したのにつづいて、その(2)としたものである。また新出土というのも、前回と同様に、ここでとりあげるのが、京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊(故水野清一隊長)の発掘調査したタレリ(Tarai)寺址の出土品であるからである。本題の「死んだ女が子を産んだ話」というのは、その出土石彫の一つに与えた主題の名称である。発掘の状況や遺跡全体のことは、報告書『タレリ——パキスタンにおける仏教寺院の調査、一九六三〜六七』にゆずり、ここでは一浮彫を「死んだ女が子を産んだ話」と同定したいきさつを中心に話をすすめてみたい。

## 一、タレリ浮彫の同定

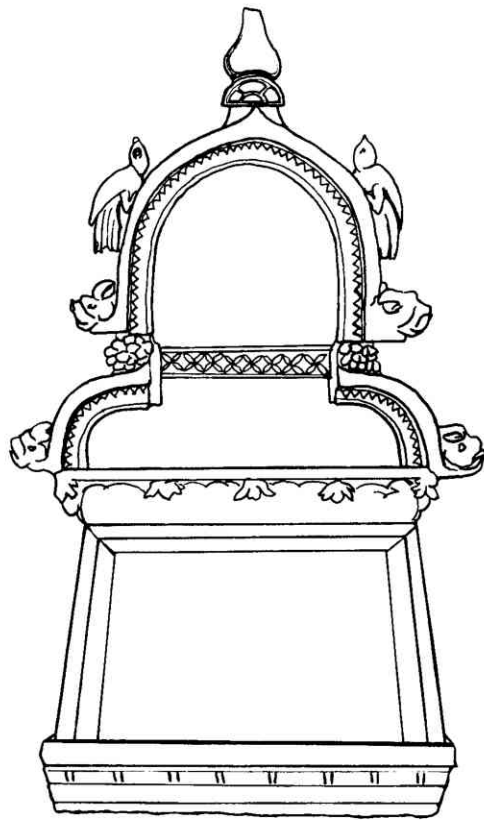
(一) タレリ出土浮彫〔図版 I〕 まずはじめに、問題のタレリ出土浮彫をみてみよう。残念ながら断片である。残高二六・〇cm、幅二二・〇cm、石材の厚さ約七・五cm、灰色がかった緑泥片岩である。浮彫は深さ三・五cmくらいまで彫りこんで、図像によっては丸彫にちかく、ガンダーラ浮彫一般にくらべると、重厚、丁寧な作品という感じがする。

この石彫断片のものと姿は、我々がふつう「破風形(Gable)」とよんでいる浮彫板に属する。ほかの完好なものをスケッチしてみると、左図

死んだ女が子を産んだ話

のようなものになる（挿図1）。いちばん下に、建物入口にあたる梯形があり、左右の框は上へいくほど細まり、内傾斜するのが特徴である。その上に三葉形の拱形<sup>アーチ</sup>がつき、屋根の構造、つまり破風をあらわす。タレリ断片は破風形梯形部分の左半分だけが残ったわけである。全体を復元してみると、全高約八〇cm、幅（底辺）約五〇cmの破風形で、ガンダーラの破風形としては大型に属する。

ではどういふところに、これが安置されるかということ、仏塔の胴部に付着させられるものである。ガンダーラの仏塔はインドの古式仏塔とちがって、基壇と伏鉢とのあいだに円筒部がはいり、それだけ丈の高い塔となる。破風形はその円筒部にとりつけられる。その面が仏塔の正面に



挿図1 破風形 ガンダーラ石彫

なり、それにむかって小階段がつき、ときには四方に階段がつくことがあるから、そのばあいは一塔に四個の破風形がつく。ガンダーラ石彫のなかには、そういうわけで破風形石彫が割合多い。ガンダーラ仏塔の当時の姿は、いまでは崩壊してほとんどみることはできないが、幸い小型の石塔（奉献塔）の完全な姿がのこっているので推測がつく。①

ガンダーラの破風形はもとといえば、インド古式の仏塔に附属した塔門（Torana）にあたる。サーンチー大塔などは、繞道をのこして周囲が玉垣（欄楯）でめぐらされ、その四カ所に塔門がつく。それがガンダーラでは、玉垣、塔門もろともに消滅して、仏塔胴部の裝飾と化してしまった。仏塔胴部によく格子文様がめぐるのは玉垣のなごりで、破風形もその一面にとりつく。本来、仏塔への入口をあらわすものであるから、破風形もやはり建物入口をうつしている。裝飾化しているので、偽破風（false-gable）というのが適切で、梯形や三葉形の内部は、仏伝や本生図の浮彫でかざられることになる。

さて、話をもとへもどし、タレリ浮彫の画像（図版I）を検討してみたい。右側に立つのがブツダである。僧衣をつけ、右手てのひらを外にして、胸のところへ挙げている。頭部の大半が欠けているが、やや首をかしいで、右手下方をみている。その下に裸形の子供が合掌して、ブツ

ダをみあげている。同様に頭部を欠き、からだをブッダにむけていたので、ななめうしろむきに描かれている。二人のあいだに、もうひとり人物像がある。右肩をはだぬいで、右手を高く挙げ、その手に花束か花縄（ガーランド）の端をにぎっている。ブッダに散花し、礼讃する姿で、天部の一人であろう。いま浮彫にのこる人物はこの三人だけである。

ここまでみてきたとき、私は仏伝中のある一話を思いだした。それは、「ある朝、ブッダがラージャグリハ（王舎城）へいつものように托鉢にでかけられたとき、ちょうど大通にさしかかると、道端で泥の家をつくって遊んでいた子供が、ブッダの姿をみとめて『あの人に小麦粉をさしあげよう』と、ブッダの鉢に両手一杯の土をさしいれた。子供心に殊勝であり、子供はその果報でアシヨカ王に生れかわったという。」（*Divyavadāna* xxvii）。これは「施土供養」として知られている話であるが、これを題材とするガンダーラ浮彫が数点知られており、中心構図はブッダと小さな裸形の子供のむかいあう姿である。しかし、タレリ浮彫とみくらべて、背景などに、どこかちがったところがあるので、疑問をのこしていたが、まもなくタレリ浮彫にもっとびったりする浮彫図をみつけた。

(一) ジャマルガリ出土浮彫〔挿図 2〕 それは、H. Ingholt, *Gandhāran Art in Pakistan*, New York, 1957, Fig. 121 に収録されているジャマルガリ (Jamāl-Garhi) 出土の浮彫である。タレリ断片と同じく破風形で、その梯形部全体である（高三八・八 cm、幅五七・五 cm、ペシヤール博物館蔵）。タレリ浮彫より一まわり大きな破風形である。さて、このジャマルガリ浮彫（挿図 2）とタレリ浮彫とは、ブッダと裸形の子供がむかいあうのが同じばかりでなく、なによりも子供のうしろにみえる奇妙な円筒形表現がよく似ている。全体が規則正しく小さな長方形に区切られているのは、切石カレンガづみをあらわしているらしい。

さて、その主題はと解説をみると、めずらしい話がのせてある。The Nursing of the Dead Woman（死んだ女に育てられた子供）とある。「ある国王が、いちばん若い夫人を寵愛し、やがて夫人はみごもった。嫉妬した年上の夫人たちは、宮廷に仕えるバラモンに賄賂をおくつかの女を誹謗させ、生れてくる子供は国と王自身の破滅をもたらすと不吉な予言をさせた。恐怖にとりつかれた国王は、バラモンの忠告にしたがって、若き夫人を生きながら墓に埋めてしまった。ところが母および生れくる子供には、前生からの善果があった。母親は死後に子供を生んだばかりでなく、奇蹟的にも子供を哺育することすらできた。子供（スダーヤ、*sudāya*) は三年のあいだ墓のなかでくらし、その後墓が崩れて

死んだ女が子を産んだ話

死んだ女が子を産んだ話

外へでることができた。そうして森のなかでさらに三年くらした。そこへブツダが訪れて、弱年なるにもかかわらず子供を比丘とした。のち、比丘となったスターヤは、父である国王のもとを訪れて、改宗させた。」

この話に該当するのは、ジャマルガリ浮彫の左半分の図像である。レンガづみの円筒状のものは、実は墓であった。同じような墓が二つならば、手前の墓の口がひらいて、横たわった女性の上半身がみえる。胸の左半分はすでに白骨化しているが、右の乳房はふっくらとして、なお生けるがごとくである。墓の前方に裸形の子供が合掌して立ち、ブツダとむかいあう。ブツダのうしろには、金剛杵をもつ半裸の人物ヴァジラパーニ (Varapani) が従っており、またブツダの前方とななめうしろに、ブツダを礼拝する人物像がある。さらに上方に、花縄(ガーランド)の端をにぎる人物の上半身がみえ、これはタレリ浮彫の第三の人物像の役割に似る。墓の上方には、空中を飛翔する童児が描かれているが、頭髪を逆だて、やや兇悪な顔付であり、墓地に棲息し、人肉を喰うという鬼霊のたぐいとみえる。

ジャマルガリ浮彫の右半分の図は、これと別な話をあらわしているらしい。中央に菩薩のあゆむ堂々たる姿があり、むかって左にそれを合掌礼拝する王侯らしい人物、反対側、浮彫の右端に金剛杵をもったヴァジラパーニが描かれる。このヴァジラパーニは、さきほどのブツダに従う力士形とちがって、イラン的服装である。菩薩の右肩あたりには花束を片手にもちあげている人物の上半身がある。これに対する左肩あたりは大きく欠損していて判断できない。菩薩の頭上には、左右から童児 (Amorini) が飛翔している。現在欠けているが、この二人が菩薩の頭上に天蓋か花環をささげもっていたとかんがえられる。

現在のところ、左半分の「死んだ女に育てられた子供の話」と右半分の「菩薩礼拝の図」との関連はわかっていない。作者は、はじめから別々の話しと意図して一枠のなかにおさめたものか、あるいは我々には知られていない筋がきで、両者がつながっているのか。ここでは、当分考察を左半分の図像に限ることにして話をすすめていきたい。

さて、ジャマルガリ出土の浮彫がすでに知られていたおかげで、タレリ断片の内容がようやくつかめた。二つの浮彫をくらべてみると、タレリ図像ではレンガづみの墓が左端にきて、子供とブツダのむきがちょうどいれかわっている。墓が二つ描れているのは同じ。ジャマルガリ浮彫の二つの墓は前後にあらわされ、タレリ図像では、墓が大小になっているが、それらは遠近感をあらわそうとしているらしい。したがって墓が二つというのに意味があるのでなく、あたり全体が墓地であることを示すための表現とおもえる。

死んだ女が子を産んだ話



挿図2 ジャマルガリ出土浮彫 38.8×57.5cm ペンシャーワル博物館  
(京都大学調査隊写真 No. 67—632)

墓のかっこうは図像からみるかぎり、円筒形ないし隅丸の長方形で、屋頂は円蓋（ドーム）である。レンガを周囲からすこしづつせりだしていき、さいごに残る小孔を一枚石ないし一枚のレンガで上からふさぐのである。したがって、円蓋の頂上には突出部がつく。どちらの浮彫にもそれがうかがえる。ただタレリ図像の大きな墓の頂上がすこしちがう。突出部がすこし丈たかく曲ってのびている。しかし、よくよくかんがえているうちにわかった。墓の上に鳥が一羽、うしろ向にとまっているのである。その背後には樹葉がある。一本の棕櫚の樹のようであるが、墓地のある森の光景をあらわしたのかもかもしれない。

タレリ図像がジャマルガリ出土浮彫と大きくちがっているところは、墓の口がやくぼんで、ひらいているようにみえながら、そこに死んだ女の姿が描かれていないことである。おかげで、私は墓と気がつかず、「施土供養図」とみまちがってしまった。作者の表現不足といえないこともないが、右半分の図像が失われているので、いちがいに非難することはできない。

さて、H. Ingholt の書には、この話がどの仏典にもとづくか記されていない。そのかわり、著者の参照した文献が列挙されている。この浮彫が発掘されたさいの報告書と、それが現在所蔵されているペンシャーワル博物館の目録である。

*Annual Report of the Archaeological Survey of India 1921-22,*

死んだ女が子を産んだ話

Simla, 1924, pp. 59-60, pl. 24d.

H. Hargreaves, *Handbook to the Sculptures in the Peshawar Museum*, (Rev. ed.), Calcutta, 1930, pp. 40-41, 59.

二書とも同一著者の手になる。さっそく二書を参照してみると、この浮彫は一九二二―二三年のジャマルガリ (Jamāl-Garhi) 遺跡発掘中にえられたもので、遺跡南側、くずれた仏塔から出土した。すぐれた手法の浮彫で、三つの破片になっていたが、つぎあわせると破風形の梯形部となり、はっきりした区切なしに一枠二場面をあらわしている、と述べる。そして右側図は未定 (菩薩礼拝図)、左側図は *The Nursing of the Dead Woman* (死んだ女に育てられた子供) と題してある。小さいながら写真もそえられていた。The Nursing of the Dead Woman という題名は、H. Ingholt よりなまに Hargreaves が命名しており、話しの内容もさきに引用してあったとおりである。しかし、かunjんの話しを伝える仏典についてなにもふれられていない。もう一つの書、博物館の案内書の方をみたが、ほぼ同じ内容の解説だけで、出典のことはやはりなにも述べられていない。これだけ完全に浮彫と経典との同定をやりながら、どうして経典の名すら挙げないのだろうか。「死んだ女に育てられた子供」の話は、それほど有名なもので、誰れでも知っているようなものなのか。私はなにかば困惑しつつ、とにかく仏伝の一つであると見当がついたので、さっそく仏伝にかんする主要な経典や、研究書などにあたってみた。話の内容や Sudāya という固有名詞などを手がかりに、仏教学を専攻する友人たちにも相談してみたが、よほど特殊なものらしく、簡単にはみつからない。ふつうのブッダの伝記にはないものである。この経典はどこかにはあるはずだから、やがてみつかるであろう。大正新修大蔵経を順々にひもといてゆけば、いずれさがしあたとおもうが、その膨大な量を前にすると、今の私にはその余裕がなかった。

しかし幸いなことに、まもなく浮彫にふさわしい仏典が、別の方面からみつかった。そのいきさつは既に「賢者の子裁判」の論文のなかで、すこしふれておいたが、要するに、「賢者の子裁判」の同定をすすめるにあたって、明治の民俗学者南方熊楠氏の論文「大岡越前守子裁判の話」をよむはめとなり、新刊『南方熊楠全集』2をひもといているうちに、「死んだ女が子を産んだ話」(同書二四―三二ページ)という別の論文の表題にぶつかった。これは *The Nursing of the Dead Woman* と同じではないか！ はたしてそのなかで劉宋、沮渠京声訳『旃陀越国王経』(大正蔵第十四卷)と西晋沙門、法立・法炬共訳『諸徳福田経』(大正蔵第十六卷)の二つの漢訳経典をみいだした。とくに最初の仏典『旃陀越国王経』の筋がきは、H. Hargreaves や H. Ingholt が紹介した内容と寸分ちがわらない。かれらのもとづいたのもこの漢訳経典にちがいない。

図版 I (小谷)



タレリ出土浮彫 26×22cm 京都大学調査隊写真 No. 63-1280



伝チャルサダ出土浮彫 33.5×26.5cm 京都大学調査隊写真 No. 59-657



もう一つの『諸徳福田経』には、全体の一挿話として簡略化されてものがたられている。浮彫の絵ときとしては前者がふさわしい。

これでどうやら一安心。タレリ浮彫の出典が知れた。しかし、どうも気になるのは、H. Hargreaves が、概してヨーロッパ人に不得手な漢訳経典からどうして、この経典をさがしだしたかである。出典もとりたててかかなかったくらいだから、さほど苦労せずに同定したようにみえる。ひょっとしたら、かれの同定の典拠となったのは、漢訳経典ではなく、それに対応するサンスクリット、パーリーあるいはチベット経典であろうか。漢文以外の経典は日本よりヨーロッパの方が一般に研究歴は占く、考古学者にも比較的利用しよい形に用意されている。しかし『仏書解説大辞典』（東京、一九三三年）や織田『仏教大辞典』（東京、再刊一九五四年）の『旃陀越国王経』の項目をみても、この漢訳に対応する他の言語の経典が存在する旨は明記されていない。漢訳仏典とくらべて残存数がごく少ない他の言語に、それを期待するのは、本来望みうすであるが……。従来、日本ではこの経典にたいする特別の研究はないらしく、解説もごく簡単にすませてある。ついでにいうと、『諸徳福田経』七巻のほうは、『国訳一切経』経集部一四に収録され、一応の和訳や解説があるが、『旃陀越国王経』のほうは、そこに収録されておらず、まだ和訳されたこともないらしい。

ではその経典が既にヨーロッパで手近に利用できるとすれば、どういうことになるか。あれこれ考えているうちに思いあたったのは、つぎの Éd. Chavannes, *Cinq cents Contes et Apologues, extraits du Tripitaka chinois et traduits en français*, 3 vols, Paris, 1910-11. (『漢文大蔵経から抜粋し、フランス語訳した物語および譬喩談五百種』)である。さっそく、そこにフランス訳された漢文経典を一つ一つあたっていったが、ついに『旃陀越国王経』はみいだせなかった。この問題にはわかに解決できそうにもない。しばらくあきらめていたが、そのうち別な発見に喜こんだ。

(三) 伝チャルサダ出土浮彫〔図版 II〕 それは京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊が調査の年次ごとに、その写真資料を保存しているアルバム（一九五九年度）のなかであった。第一回の調査のとき、つまり一九五九年に隊員の諸氏が、パキスタンの発掘地にちかいチャルサダ (Charsada) 村の Abdul Ghani Khan 氏の蒐集するガンダーラ彫刻を見学し、その数点を写真に撮っておられたものである。その一つが、まさに「死んだ女が子を産んだ話」の浮彫であった（図版 II、林巴奈夫氏撮影）。構図はさきに知られた二つとまったく同じとい

死んだ女が子を産んだ話

うわけではない。三つの浮彫は、どれか一つのうつしというより、それぞれに作者の創意があらわれている作品である。

この第三の浮彫はチャルサダ出土と伝えられ、高さ三三・五cm、幅二六・五cmの浮彫板である。彫刻技法にはすこし粗っぽいところがある。たとえば墓のレンガづみを示す筋のいれかたをくらべてみよ。丁寧さの度合は、ジャマルガリの作品、ついでタレリ浮彫、そしてこの作品の順であり、それがそのまま製作年代の順になるかもしれない。

さて構図についてみると、中心はやはりブッダと子供のむかいあう姿であるが、子供の手はブッダの左手をにぎらんばかりに表現されている。おもしろいのは、そのうしろの墓のなかに、また子供が坐し、母親の片乳房を両手でかかえている図である。二つの子供の姿は、むろん二人の子供のいみでなく、あとの図は子供がおかれていた情況の説明である。墓のなかには、横たわる死母の上半身がみえる。ジャマルガリ図と似てはいるが、表現の拙さは極端である。うっかりすると女性の半身とはみえない。しかし、みかたによっては、左胸をのこして白骨化した無残な母親の姿をあらわそうとした苦心の結果かもしれない。死者の乱れた髪と敷布の端が、浮彫の下枠にまではみでている。

ブッダのうしろにヴァジラパーニ（金剛力士）がつき従うのは、ジャマルガリの構図と同じ。ただしこのヴァジラパーニは禿頭、有鬚で、シレノス・タイプの人形の貌である。このヴァジラパーニとブッダのうしろには、樹木がえがかれていたらしいが、いまは全面に剝離してわかりにくい。それから、この図としてはなほ特異なのは、墓の上方にいる二人の姿である。いな、人とはいえない。墓地や薄暗い森のなかに棲息し、人間の屍をひきちぎって喰うという夜叉悪鬼のたぐいである。ブッダのちかくにいる悪鬼は、右手をあげ、顔をそむけて、ブッダを避けている。顔付は兇悪で、髪は逆立つ。こうした残忍な悪鬼もブッダには異怖を感ずる。その上方にも、もう一人のおそろしい顔をした悪鬼がいる。ライオンの顔で、足の爪も、からだの三葉文様も異様である。これは、手足をだらりとさせた屍とおもえる人間をひきさらい、空中を飛んでいく。ブッダの方をふりむきながら、あきらかにこれを敬遠して逃げていくようす。この図をみる人は、きつとおそろしい墓場の光景をおもいおこすであろう。子供はあのような恐怖の環境で一人生きていたのだと。

四 その他のガンダーラ浮彫〔挿図 3、4〕 私はこの第三の資料をえたので、タレリ浮彫とあわせ、一文を草する決心がついた。しかしどうも気がかりなのは、H. Hargreaves が一九二二―二三年にジャマルガリ浮彫をえて、それをめぐりに *The Nursing of the Dead Woman* と

同定した当時の、ヨーロッパの研究事情である。南方熊楠氏が「死んだ女が子を産んだ話」で『旃陀越国王経』と『諸徳福田経』の二經典を紹介したのは一九二四年（『日本土俗資料』）のことで、これとの関係はみこみ薄である。

しかし私が参照を怠っていた書物がまだ一つ残っていた。それはA・フーシェ Foucher が、その亡くなる二年前、一九五一年に白からの大著、A. Foucher, *L'Art Gréco-Bouddhique du Gandhara*（『ギリシア風ガンダーラ仏教美術』）に対して与えた補遺である。A・フーシェの著作の構成は、第一部、建築と第二部、浮彫とが第一巻（Paris, 1905）、第三部、彫像が第二巻第一冊（Paris, 1918）、第四部、歴史が第二巻第二冊（Paris, 1922）におさめられている。そしてこの補遺訂正と全体の索引とが第二巻第三冊（Paris, 1951）になる。さいこの書物は一〇〇ページほどの小冊子である。いま問題にしている浮彫の研究は第一巻、つまり一九〇五年出版以前の資料にもとづいている。さきほどのジャマルガリ浮彫は一九二一―二二年の発掘品であるから、第二巻第二冊の出版（一九二二年）にも間にあわなかった。しかし仏伝図としてこれほど興味ぶかい浮彫に、A・フーシェが関心を示さぬはずはない。そう思いつつ、仏伝浮彫関係の補遺、訂正をよんでいくと、第一巻五一―五ページの補遺の箇所で、*La nourrisson de la morte* ということばにぶつかった<sup>③</sup>。まさに英語の *The Nursling of the Dead Woman* である。補遺の要点はこうである。

A・フーシェはガンダーラ彫刻にあらわされた本生仏伝図を、ブツダの生涯に従って検討していく（本生と誕生から涅槃まで）。しかしブツダの伝記中にも、時間的順序を決しかねる話がある。そこで、そうした仏伝図を一まとめにし、「ブツダの姿が坐ってあらわされている情景（*scène assise*）」と「立ってあらわされる情景（*scène debout*）」に分けて述べる。補遺はその「立ってあらわされる情景」のはじめに与えられている。

「……いま、この立ってあらわされる情景に挿入さるべきものとして、少なくとも三つが知られていると行ってよい。そのうち二つは第二巻に図示したが、三番目のものはその余地がなかった」という。

そして三番目が *Le nourrisson de la morte*（死んだ女に育てられた子供）の話である。それに対応する参照文献として、ジャマルガリ浮彫をいみする H. Hargreaves 著書もあがっているが、ほかに *Journal Asiatique*, 1917, pl. I-II とでている。一九一七年とは！一九一七年に既に「死んだ女が子を産んだ話」を話題にした論文があり、しかも図版まであるらしい。

死んだ女が子を産んだ話

即刻、京都大学文学部（哲学科） 閲覧室にいつて参照させていただく。その論文はやはりA・フーシェの手になるものだった。

A. Foucher, *Interprétation de Quelques Bas-Reliefs du Gandhâra*, JA, Serie XI, tome 9, 1917, pp. 257-281.

そして図版IとIIには「死んだ女が子を産んだ話」を主題とするガンダーラ石彫三点、西域クチャ出土の壁画が一点、のせられている。同定



挿図3 カルカッタ博物館浮彫 20×34cm (JA 1917, pl. I-1)

の根拠となる仏典には、はっきりと『旃陀越国王経』が指摘されている。これで私の疑問も氷解した。たいへんうれしかったが、多少落胆もまじった。というのは、私が「死んだ女が子を産んだ話」の最初の発見とばかりおもっていたジャマルガリ浮彫以外に、既に三点のガンダーラ浮彫が知られていて、それを材料にA・フーシェが周到な同定をおこなっていたからである。Le nourrisson de la morte (死んだ女に育てられた子供) というのはA・フーシェの命名で、従って英語の The Nursing of the Dead Woman というのは、その英訳であった。

A・フーシェの三点の浮彫と一点の壁画は、まぎれもなく「死んだ女が子を産んだ話」であり、我々の三点とはすこしずつちがった表現をもっている。ここでは、その二つだけ再録させていただく(挿図3、4)。これで合計石彫六点、壁画一点の図像が知られたことになる。

A・フーシェの論文には、かれがはじめてこの同定をおこなったいきさつがしたためられている。それによると、かれがこの主題の浮彫に、はじめて出くわしたのが、一八九六年、カルカッタ博物館においてだった(挿図3)。そしてそのあと同種の浮彫が少なくとも二つ確認できた(JA, 1917, pl. I-2, II-1)。それらはふつうの浮彫とくらべ、構図が特殊で、一見ただけで主題の大半が推測できるものである。それにもかかわらず仏典との対応はいっこうにつかめない。結局フーシェの大著のなかには収録されずにおわった。そのうち、一九一〇年ころ、ロシアの S. F. Oldenburg 一行が、中央アジアの探検から同じ主題の壁画(クチャ、キジール千仏洞出土)をもちかえってきた(挿図4)。そこには二重屋根の墓廟とおぼしき建物があり、そのなかに女性の上半身とやや大きくなった男の子のうづくまる姿とがえがかれている。オルデンブルグはその報告書のなかで、

「祠堂（チャイトヤ）の内部に女性が一人、おそらく埋葬されてよこたわっている。……女性のからだは黒褐色で、子供がすわんとしている。乳房は肉色である。つまり作者はそれによってただ一つの乳房だけが生きのこり、のこりは屍にすぎないことをいいあらわそうとしている」とかいている<sup>④</sup>。經典なしでもほぼ正確に内容を予想している。しかし完全な同定をするには、どうしても一つのテキスト（仏典）が必要である。そして一九一〇—二一年には、先刻も述べた Ed. シャヴァンヌの『漢文大藏経から抜粋し、フランス語訳した物語および譬喩談五百種』三巻が出版され、A・フーシェはそれについてさがしたが、みいだせなかった。しかし可能性はある。A・フーシェはシャヴァンヌに漢訳經典



挿図4 クチャ出土壁画（模写）  
（Oldenburg 調査報告書より）

から浮彫の主題に該当するものをさがしてくるようになった。

当時シャヴァンヌはシナ学講座を担当するコレジ・ド・フランスの教授、A・フーシェは同じパリーのソルボンヌ大学でインド学を担当していた教授で、二人は同年であった。さらに、シャヴァンヌと同じコレジ・ド・フランスでインド学を担当するのがシルヴァン・レヴィ S. Lévi であったが、A・フーシェはそのレヴィの最初の教え子でもあった。そしてシャヴァンヌとレヴィとのあいだには、漢文仏教資料にかんする協同研究がしだいに成果をあげつつあったときで、機はまさに熟していた。

やがてシャヴァンヌはA・フーシェの切望にこたえて、膨大な漢文仏典のなかから、みごと『旃陀越国王経』をみつけだしてきた。かれはそれに完全なフランス語訳を付してA・フーシェのもとにおくりとどけてきた。すばらしい能力であるとおもう。A・フーシェの感激もひとしおで、さっそくシャヴァンヌの手になる『旃陀越国王経』の全訳をかかべて論文をかいたしだいである。A・フーシェはそのなかで「最初に浮彫をみて、その同定にこぎつけるまで二〇年の辛抱を要した」と述懐しているのが印象的である。

ついでのことには、もう一つ、A・フーシェが同じように以前から考えあぐねていたガンダーラ浮彫についてシャヴァンヌに依頼したが、これ

死んだ女が子を産んだ話

も回答がきた。やはり漢訳經典、大莊嚴論經 (Sūtrāṅkārā) の一話「比丘と宝石商と鳥」を示唆されて解決がついた。これがA・フーシェの論文の後半の内容になっている。<sup>⑤</sup>

### 三、「旃陀越国王経」について

さてタレリ浮彫の同定のいきさつを話すのに少々手間どってしまったが、つぎにその典拠となった『旃陀越国王経』についてのべてみたい。この經典は独立したもののだが、『大正新修大藏経』の版にして、わずか一ページ分くらいの短いものである。以下に、よみくだしの全文を紹介したいとおもうが、よみやすくするため、あらかじめその文章の構成について一言しておきたい。というのは、この短い経がすくなくとも三つのまとまった部分から構成されているからである。

第一段は、冒頭の「聞如是。一時仏在舍衛国。祇樹給孤独園。與千二百五十比丘俱。」につづく本文で、無実の罪で殺された王夫人が、墓の中でなお子供を生み育てるといふ奇蹟物語にはじまり、その子須陀 (Sudāya) がブッダに救われて比丘となり、やがて阿羅漢をえて、実の父である旃陀越国王を教化し、王ならびに国人をブッダの前につれてくるまで。既に浮彫の内容として紹介した部分がこれにあたり、全体の約三分の二を占める。

第二段は、そこに集った王と国人を前に、ブッダが過去世のある一話を説く部分。ある凡人貧者が比丘僧に酪酥をたてたおかげで、そのごの生死のくりかえしに、いつも幸福な境遇を得ていたが、さいごに王として生れてきたとき、みごもった母ウシを殺させるといふ罪なことをしでかした。

第三段は全体のむすびである。ブッダはここで過去物語と現世物語との因果関係を解きあかす。死母に生み育てられるという辛いおいたちを味わった須陀 Sudāya は、かつてみごもった母ウシを殺させた国王であり、須陀の母は、そのとき国王に腹のなかの子ウシだけでも助けてやってほしいと頼んだ王夫人であった。怨みをいだいたそのときの牛の持主は、現世にバラモンとなって、国王をそそのかし、須陀の母を殺させた。旃陀越国王とブッダ自身の前生については、ここではとくにとりあげられていない。そうして、さいごにブッダは「罪福響応。如影随形。未有為善不得福。行惡不受殃者。」と、因果応報のたしかさを強調して、人々に教誡をたれる。

以下の訳文においては、改行してそれぞれの段落を示すことにする。

旃陀越國王経

聞くことは是の如し。一時、仏は舍衛国、祇樹給孤独園に、千二百五十比丘と俱にあり。時に、国王あり、号して旃陀越と名づく。婆羅門道を奉事し、王の国政を治するに、輒ち諸婆羅門を任用す。王の小夫人、特に珍重せられ、時に兼ねて娠る。諸夫人これを憎み嫉み、金をもって婆羅門に賜い、これを王に譖らしめて言く、この人凶悪なり。若しそれを生まば、必ず国の患とならん、と。王これを聞きて甚だ愁憂いて樂まざ。婆羅門に問いて言く、いかんすべきや、と。婆羅門言く、唯だまさに併せこれを殺すべきのみ、と。王言く、人の命は至って重し。何ぞ殺すべけんや、と。報えて言く、若し殺さざれば、必ず亡国喪身の憂あらん。禍は細からず、と。王便ちその言を聴き用う。遂に枉殺せられて、便ち葬りてこれを埋む。児はのち塚中に生まる。その母半身朽ちず、児はその渾を飲むを得う。乃ち三年に至り、その塚崩壊し、児のち出ざるを得たり。鳥獸と共に戯れ、暮れて即ち塚中に還りて宿る。児、時に年六歳たり。仏普き慈をもつて、その勤苦、鳥獸と群を同じうするを念じ、即ち化して沙門となり、服を被りて、往きて呼び、これに問いて言く、汝これ誰が家の子ぞ。居は何処にあるや、と。児、歡喜し、報えて言く、我に家と居なし。但だこの塚中に栖宿るのみ。今乞う。道人に隨いて去らん、と。仏言く、汝、我に隨いて去るは、何等が為ぞ、と。児、報えて言く、我今善かれ悪しかれ、終にまさに道人に隨うべし、と。仏便ちそれを將いて、祇洹中に到る。諸比丘の威儀法則なるをみて、意甚だこれを樂しむ。便ち仏に白して言く、我欲すらくは、比丘となさんことを乞う、と。仏即ちこれを聽し、手をもってその頭を摩づ。髮墮ちて袈裟自然と身に著く。名づけて須陀と為す。仏より尊戒を受け、勤意精進し、心懈怠せず。七日にして便ち羅漢道を得う。仏、須陀に語るらく、仏より尊戒を受け、欲の根本を抜き、生死に自在を得たり。今宜しく往きてかの旃陀越王を度すべし、と。須陀、仏の教を承け、頭面もて地に著け、仏に礼を作し、往きてその国に到る。住まりて宮門に在り、王に見えんことを請う。臣下、王に白して言く、外に道人あり。乞うて王に見えんと欲す、と。王これを聞き、即ち出でて、ともに相い見ゆ。問うて言く、我、大いに憂うるところあり。まさにいかんすべきや、と。道人言く、何ぞ憂うる所や、と。王言く、我年已に長じ、且に欲過ぎんとする時、国に統嗣なし。これが為に愁憂うるなり、と。道人、王の語を聞き、初めこれに応ぜず、独り笑うのみ。王便ち悲りて言く、我、道人と語り、初め我に答えず、しかして反り

死んだ女が子を産んだ話

死んだ女が子を産んだ話

て独り笑う、と。即ち治してこれを殺さんと欲す。須陀その意を知りて、便ち軽く挙り、飛翔し、上りて空中に住る。分身散体して出入無間たり。王その威神変化を見て、即ち恐怖して、過ちを悔いて言く、我、実に愚癡たり。真偽を別たず。唯だ願わくは、大神よ、一たび還りて、我をして自から帰命するを得しめよ、と。須陀、即ち空中より下りて、王の前に住まり、王に謂いて言く、若しよく自から帰する能わば、甚だ善し。まさに自から仏に帰すべし。仏は是れ我が大師、三界の尊にして、衆生を度脱す、と。王便ち群臣に勅し、嚴駕してまさに仏所に到らんとす。須陀便ち道力をもって、申臂（腕をのばす）のごとき頃に、王および人民を將いて、俱に仏所に到る。（王は）頭面もて地に著け、仏に礼を作し、命を三尊に帰し、乞うて五戒を受け、優婆塞に為らんとす。仏、王に告げて言く、知らんと欲せば、比丘須陀は是れ王昔し婆羅門の譖を言うを用い、兼ねて娠れる者を殺せしところの子なり。母死せしち、子塚中に生れ、塚中に母の半身朽ちず、その漚を飲むを得う。乃ち六年に至り、今我に随いて道を為し、乃ち此に致る、と。王、仏の言を聞き、更に恐怖して、自から勝う能わず。

仏言く。昔、拘先尼仏の世に、国王ありて、号して仏舎達と名づく。王および國中三億の人、皆な王に随いて三尊を供養す。時に凡人あり。貧に居り業なし。常は國中の富姓に賃われ、放牧し牛を養うこと數百頭。王および人民の比丘僧を供養するを見て、即ち問いて言く、卿等、何するところぞ、と。人民答えて言く、吾等、三尊を供養して、のちまさにその福を得べし、と。即ち復た問うて言く、何等の福を得るや、と。人民報えて言く、人の淨心もて三尊に施す者あらば、のち所在の処、安樂尊貴にして、勤苦あるなし、と。即ち念じて言く、我貧窮に居り、但だ賃われて放牧するのみ。自から飲食なし。まさに何を以てて施さん、と。即ち念じて言く、唯だ、まさに還りて牛の漚を取り、煎でもって酪酥となさん、と。淨心もて比丘に上る。比丘僧呪願して言く、汝をして世世所在の処、まさにその福を得さしむべし、と。自後、展転して生死を更え、輒ちその福を受く。或いは上は諸天となり、或いは下は王侯となる。しかるのち、王となり、時に遊獵に出で、國中の人に好き牯牛の犢を懐めるあるを見る。王便ち人をして牛を取り、これを殺さしむ。夫人、王に語るらく、人をしてその子を殺さしむるなかれ、と。時に牛主追い還り、破りてその子を取り、これを養護す。その主、悲りて言く、まさに王をしてこの牛の如くたらしむるべし、と。

自後、魂神来りて王がために子となる。時に未だ出生せずして、母は王の殺すところとなる。知らんと欲せば、須陀は即ち是れなり。須陀の母の枉殺せられしは、則ち是の時の王夫人なり。婆羅門は牛主、是れなり。須陀の塚中に生れ、その母半身朽ちずして、その漚を飲み、もつて自から長大し得し所以は、その宿命に酪酥をもって比丘僧に上りし故に由る。仏言く、罪と福との響応すること、影の形に随うが如し。未



だ善を為して福を得ず、悪を行いて殃を受けざる者なし、と。王は仏の経を説くを聞き、意解け、即ち須陀洹道を得たり。國中人民皆な王に随いて五戒を奉じ、十善を行い、三尊に帰命し、或いは、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢を得し者あり。四輩の弟子、天・龍・鬼神、経を聞きて、歡喜し、前みて仏に礼を作し、而して去る。

以上が『旃陀越国王経』の全容である。浮彫では知ることのできない主人公の名前や、またこのような浮彫がどうして仏教寺院の荘嚴になるかについても、経典の後半をよむうちに了解できたとおもう。

このような経典の構成、つまり最初に現世物語、つぎにそれと似た過去物語、さいごに二つの連絡と教誡談をのべるという三部構成は、実は『旃陀越国王経』だけにみられるのでなしに、従来から仏教文学のうち、本生談 Jataka ならびに譬喻談 Avadana として分類されているものに共通する叙述形式であることが知られている<sup>⑥</sup>。元来、本生と譬喻には共通の性格がつよい。どちらも輪廻 Samisara と業 Karma の考え方を基本にし、過去と現在の因果応報を具体的な話にして、人々に説きかせるものである。そのばあい本生と譬喻とを区別するのは、経文のさいごの連絡部分で、過去物語中の誰かをブッダ自身の前生に比定しているか、いなかによる。つまり前生談のうち、ブッダに限定したものが本生談で、顕著な仏弟子、信者などの前生物語が譬喻談である。

ただ、ブッダを主人公とする本生説では、ブッダの現世での偉業は周知のことだから、いきおいブッダがその前生にいか徳にみちた行為の主であったか、その過去物語が主体となり、比丘僧や信者を主人公とする譬喻談では、現世の善行や奇蹟が詳しく語られ、過去物語はその因縁を説明するための短かなものですまされるのが普通となる。したがって形態上では、本生は、はじめの現世物語が短く、つぎの過去物語が比較的長文となり、譬喻ではその逆となる傾向にある。我々の『旃陀越国王経』はまさしく後者の例、譬喻談として典型的な性格をそなえているといふことができる。

また、彫刻家がこの経典に素材をもとめようとすると、やはり現在物語が構図の中心となってくる。既にみたとおり「塚中の奇蹟」が共通の構図であった。一方できあがった浮彫をみると、ブッダの姿が一見主人公のように大きくえがかれており、ブッダの伝記をえがく仏伝図と区別しにくくなる。そういう意味では、ガンダーラの譬喻談図は本生図より仏伝図と混同される傾向にあったといえる。

死んだ女が子を産んだ話

さて、もう一度『旃陀越国王経』に話をもどすと、現存の漢訳經典のうち、本生および譬喩談をあつめるものとして、『六度集経』、『生経』、『菩薩本縁経』（以上大正蔵第三卷所収）、『撰集百縁経』、『雜宝蔵経』（以上大正蔵第四卷所収）など数多く知られているが、とりわけ『生経』にあつめられた本生・譬喩の諸編が、『旃陀越国王経』にいちばんよく似ているようにおもふ。『生経』の説話の多くが「聞如是。一時仏遊舎衛国。祇樹給孤独園。與大比丘衆千二百五十人俱。爾時……」と、『旃陀越国王経』とはほぼ同じ冒頭文ではじまっていること、現世物語、過去物語、連絡の三部分をきちんとそろえている点、ときには訳語、訳文にも似たところのある印象をうける。『旃陀越国王経』が『生経』のなかの一話にまぎれても、けっしておかしくないほどである。

『生経』は西晋三蔵竺法護訳（二八五年）と伝えられ、『旃陀越国王経』は宋居士、沮渠京声訳（四五五年）とされ、その間に一七〇年ほどの隔りがあるが、訳文からそれほどの差が感じられない。むしろ原典において両者が類似していたせいであろうが、あるいは実際には訳出年代がもっともちかかったのではないかとおもふ。しかし今これを論ずるのはむづかしいので、疑問のみ呈して後考をまちたい。

さいごに『旃陀越国王経』の独立経としての存在理由を考えてみるなら、やはりそのすぐれた文学性によるものとおもふ。「死んだ女が子を産んだ話」という現世の奇蹟物語は、人の心をよく動かすところがあり、つぎの過去物語、因果をあかす部分への展開も、多少理屈っぽい気はしないではないが、比較的スムーズにむすばれ、教訓話でありながら、文学味を保ちえた傑作であるといえる。南方熊楠氏が「死んだ女が子を産んだ話」として、日本を含め、古今東西の類話をあつめられたが、おそらくその多くは本経と同じ古代インドの民話に起源をもち、この説話の文学的価値の高さ、およびそれゆえの流伝の広さというものが、よく示されているようにおもふ。

#### 四、むすび

以上、浮彫と仏典について、それぞれ述べてきたので、ここでふりかえってまとめにしたい。

A・フーシェはさきの論文で、仏典中の埋葬ということ、かなりの紙幅をついやして問題にしている。それはインドの当時の風習として火葬が一般的であつて、經典のように死母の埋葬というのはそれにあわないとするからである。墓中で子供が生れ育つとするのは、埋葬の風習が一般的である中央アジアや中国へきてからの変容であるとし、もとの筋がきは、処刑のおこなわれるさみしい場所で、母親が幽閉され、餓死さ

せられたのではないかという。母親は死の直前に出産し、授乳すらおこなったと合理的な解釈をくだしている。そしてガンダーラ浮彫中にえがかれたレンガづくりの円筒形建物や切妻屋根の小屋のごとき表現 (JA, 1917, pl. I-2, II-1) は、墓でなくて、牢であるとみる。

A・フーシェの疑問にも一理あるが、ほかの本生、譬喩談にあたってみると、やはり埋葬に言及するものがときどきみられるから、一概に埋葬を否定することはできないようにおもふ。説話自体としても、罪なく殺された母親が墓中でわが子を生み育てるといふ奇蹟に、人の心が動かされるので、あまり合理的に考えては、物語のおもしろみを失う。

ガンダーラを含めて仏教時代のインドには、火葬ばかりでなく、埋葬もあわせおこなわれていたと考えたほうがよさそうで、今後の考古学の一つの問題となりうる。ただ浮彫図のような墓が実際インドにあったかどうか確かめられていない。むしろ、ガンダーラ美術の表現意匠がインドのそればかりでなく、ギリシア、ローマをはじめ、西アジアの各地の要素をふくんでいるのが特色であるから、墓一つの表現についても、ひろい視野での考察が必要である。

つぎに前節で『旃陀越国王経』と『生経』などの比較から、双方の訳出年代に多少の疑問を呈したが、「死んだ女が子を産んだ話」の内容は、もう一つの漢訳經典の『諸徳福田経』（大正蔵第十六卷）の一節に簡略化されてのせられている<sup>8)</sup>。この經典は、西晋沙門、法立、法炬共訳（二九〇―三〇〇年）とされている。もしこの訳出年代が信ぜられるなら、『旃陀越国王経』あるいはその原型となる経が、それ以前に成立し、普及していたと推測できる。

一方、文献をはなれて、浮彫の考古学的な考察からすると、タレリ出土浮彫は、そのC区第一塔院の主塔付近から出土したもので、その地区からの出土貨幣は、クシャン王のヴィマ・カドフィセス Vima-Kadphises（西暦一〇〇年ころ）、カニシュカ Kanishka（一四四―一七一年ころ）、フヴィシュカ Huvishka（一七一―二〇三年ころ）のそれぞれ一個づつであった。数がすくないので、そのまま出土彫刻の年代にむすびつけることはできないが、同じタレリD区塔院出土の「賢者の子裁判」の浮彫のばあい、やはり出土貨幣からフヴィシュカ王の時代を一応の目安としたので、ここでも、それとの様式比較やそのほかの点を考慮して、同じころ、つまり西暦二世中の作品とみてさしつかえないとおもう。

同じ主題の他の作品については、発掘の状況がはっきりわからないので、こまかな年代を立てることができないが、ジャマルガリ出土品（挿図2）とカルカッタ博物館品（挿図3）は、様式のうえからタレリ浮彫にやや先立つふうにみうけられ、他の三つの石彫（図版II, JA, 1917,

死んだ女が子を産んだ話

死んだ女が子を産んだ話

pI. I-2, II-1) はそれより遅れる感じである。いずれにせよ、みな二、三世紀の作品で、『旃陀越国王経』の漢訳より先立つ。「旃陀越」という地名は所在不明で、この経典がいつ、どこで成立したか不明であるが、少なくとも西暦二世紀にはガンダーラで、それに相当するものが説かれていたと結論することができる。

キジル千仏洞将来の壁画(挿図4)は石彫より製作が遅れ、五、六世紀以降の作品とおもわれる。これはガンダーラ仏教の西域への伝播を考えるうえで貴重な資料となる。中国や日本では、このような小乗仏教的内容をもつ譬喩談が、わざわざ絵画彫刻にうつされることは、しだいに少なくなるので、その点この壁画一つでも、西域仏教の中間的性格をよく示唆するようにみえるからである。

〔註〕

- ① A. Foucher, *L'Art Gréco-Bouddhique du Gandhara*, Tome I, Paris, 1905, figs. 70~72. 参照。
- ② A. Foucher, *ibid.*, figs. 255, 256a. H. Ingholt, *Gandharan Art in Pakistan*, New York, 1957, figs. 110, 111.
- ③ A. Foucher, *ibid.*, Tome II, 3, Paris, 1951, pp. 848-7.
- ④ S. F. Oldenburg, *Russkaya Turkestanskaya Ekspeditsiya 1909-1910*, St. Petersburg, 1914, p. 69, fig. 59.
- ⑤ A. Foucher, *JA*, 1917, pp. 271-279, pl. III, IV.  
この浮彫の一つ(ラホール博物館蔵)が、H. Ingholt 前掲書 fig. 170 に図示されているが、H・インホルト氏はA・フーシェの論文をみていないため、内容未定としているのは惜しい。
- ⑥ 千潟龍祥、『ジャータカ概説』鈴木學術財団、一九六一、三〇一三二ページ。岩本裕、『インドの説話』紀伊国屋書店、一九六三、二〇一二六ページ。同、『アヴァダーナシヤタカについて』(『東洋学報』四四―四、一九六二、九四―一〇七ページ)。
- ⑦ 南方熊楠、「死んだ女が子を産んだ話」(『南方熊楠全集』2、平凡社、一九七一、二四―三二ページ)。
- ⑧ 『諸徳福田経』(大正藏第十六卷、七七七ページ)の該当箇所の原文はつぎのとおり。  
復有一比丘。名曰須陀耶。即從座起。整服作礼。長跪叉手。白世尊曰。我自惟念。先世之時。生維耶離國。為小家子。時世無仏。衆僧行教化。我時持酪。入市欲売。值遇衆僧。大会講法。過而立聽。法言微妙。聞之欽悅。即奉瓶酪。布施衆僧。衆僧呪願。益懷欣踊。緣此福報。壽終生天。下生世間。財富無限。九十一劫。豪尊榮貴。末後余愆。生於世間。母妊數月。得病命終。埋母塚中。月滿乃生。塚中七年。飲死母乳。用自濟活。微福值仏。開闡明法。超度死地。逮得眞真。諦哉罪福。誠如仏教。  
子供の名前が須陀耶(Sudaya)となっており、その母は病死して埋葬されたと述べられている。